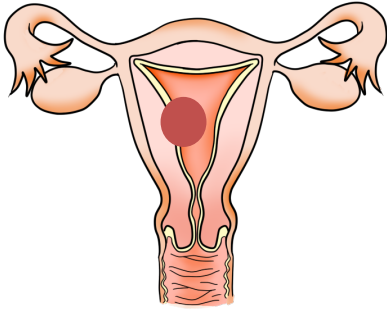


子宮体癌検査について

子宮体癌は閉経前後の年齢から発症するリスクが高くなります。発症リスクもある程度知られていて、不正出血などの症状が比較的出やすい疾患ですので、放置せず検査をしましょう。

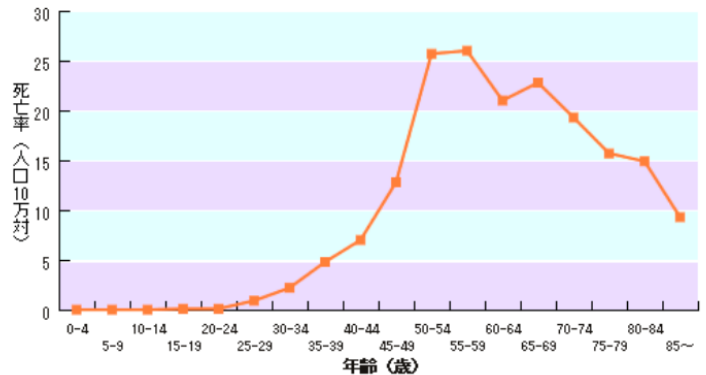
子宮体癌とは



子宮体癌とは、子宮内膜にできる癌です。若い間は生理によって毎月子宮内膜が剥がれ落ちますが、閉経後はその現象が無くなるため、子宮体癌の発症率が上昇していきます。

右図の様に、子宮体癌は閉経前後から、発症率が上昇していきます。**閉経後の不正性器出血の5-10%が子宮体癌である**とも言われています。

一年齢階級別子宮体がん罹患率



国立がんセンターがん対策情報センター罹患データ【2001年】

子宮体癌のリスク

子宮内膜を増殖させる作用があるのはエストロゲンというホルモンです。閉経後も過剰にエストロゲンが産生されてしまったり、反応が強くなってしまうと子宮体癌のリスクとなります。

- **肥満**
脂肪からもエストロゲンが産生されるためです。
- **未経産**
特に**PCOS(多嚢胞性卵巣症候群)**といった月経不順の方はリスクが高くなります
- **乳がんの治療中**
乳がん治療薬(タモキシフェン)には、子宮体癌のリスクを高めるものがあります。**乳がんの既往自体も子宮体癌のリスク**となるので、乳がんになった方は、半年ごとには子宮体癌検査をお勧めします。
- **植物性エストロゲンの長期摂取**
大豆イソフラボンやエクオールといったサプリメントは**植物性エストロゲン**と呼ばれ、体内で弱いエストロゲン作用を示します。そのため更年期症状の改善には有効ですが、必要異常に摂取してしまったり、長期摂取している場合は子宮体癌のリスクを上昇させます。
- **家族歴**
血縁者に子宮体癌を患ったことがある方だとリスクが上昇します。

子宮体癌検査の方法



左の様な、ソフトサイトという道具を子宮内に挿入して、子宮内膜の細胞を採取します。子宮頸がん検査と比べて比較的侵襲が高く痛みを伴います。さらにこの検査は正診率が87%であり、決して診断率が高い検査とは言い切れません。仮に1度検査をして異常が無くても、不正出血が続く時は、再検査したり精密検査を行う必要があります。

子宮体癌検査の結果

子宮体癌検査結果は、I-Vまでの数字で評価されます。数字が大きくなるほど悪い結果となりますが、I・IIは正常範囲内であるため、精密検査の必要はありません。III以上の場合は精密検査が必要となりますので、他院への紹介となります。

子宮体癌検査後の注意点

- **出血**
子宮内膜に器具を挿入するため、出血が数日間続きます。感染を防ぐために出血がある間は浴槽に入るのを控えて下さい。
- **腹痛**
検査後腹痛を認めることがあります。腹痛が増強する場合や発熱してしまった場合は外来を受診して下さい。

子宮がん検診で、子宮体癌検査を希望される場合

子宮内膜細胞診断にかかる費用(**3600円**)を別途お支払いいただきます。合計で5000円のお支払となります。子宮体癌検査の結果は再診をしていただき説明となります。